

プロジェクト名 北大留学生倍増プロジェクト

代表／相川 雄哉 経済学部 経営学部 4年

■実施の内容

本プロジェクトでは未だ留学を考える学生が少ない北大の現状を打破するため、その原因を3点 ①期待感の欠如、②海外へ飛び出す不安、③情報不足 であると考え、約4ヶ月間にわたって本学留学経験者が「期待感溢れる海外と留学の方法」を提案することによって問題解決につなげてきた。具体的には毎月開催の留学ワークショップと相談会、およびスキルアップ合宿の開催を計画した。

まず、留学ワークショップについては非常に大きな成果があったと言える。このワークショップは10月に4回、11月に3回、12月に2回、1月に2回行った。各回5名から20数名が集まり、総勢100名以上の学生に留学および海外の魅力を広く伝えることができた。ワークショップでは、各回多様な留学経験を持った学生をプレゼンターに呼び、短期海外研修から海外大学院進学まで幅広い留学の選択肢があることを知ってもらうことができた。また、実際に留学するとしたら、どこにどのような形で、何を目的にするのかを明確化するワークシートを作成し、各回グループワークを行った。これは、ぼんやりとした留学のイメージに形を与えることを目的としたものである。各回の終了後には個別相談会も実施した。それぞれが留学に異なった問題を抱えていることから、それらを留学経験者が解決することを目的としたものである。

一方で、実施が叶わなかったのが留学合宿である。合宿で英語のスキルアップを図り、留学の効果を最大化することを目的としていた。しかし、英語力向上が渡航直前の課題であるのに対して、本イベント参加者はまだ留学を考え始めたばかりの学生で、渡航までには基礎的な英語力習得の為に長い期間が必要であったことから需要が少なく、実施には至らなかった。

そこで、留学の「応募」段階で必要となる英語スコアの取得のための英語力向上ワークショップを行うことで、留学の質向上を担保した。次年度は、今年度から留学の準備を始めた学生たちが実際に渡航する年にあたるので、そこで実施することによって本来の目的が十分に果たされると考えている。

■実施時期

2016年10月～2017年1月

■実施の評価

まず、留学の可能性や方法について幅広くプレゼンを行い、また、実際に留学計画を立ててみるワークショップでは、参加した学生から満足の声を広く聞くことができた。具体的には、「留学は自分にとって遠い存在だと思っていたが、そうではないことがわかった。」「参加をきっかけに交換留学に応募をした。」という声があった。実際に留学をした人の話を聞く機会は、これまで稀に開催されるイベントや友人を介してしかなく、ほとんど対面で話す機会はなかった。しかし、この企画で実際に留学経験者の声を生で聞くことができたことは、留学を考えていた学生はもちろん、留学など縁遠いと考えていた学生にまで広くインパクトを与えることができたと言えるだろう。

また、個別の相談会では、費用や留年、語学力などの問題を個別に話し合うことで、その障壁をなくすことができた。私たち自身も、それぞれが留学にあたって様々な問題を抱えている現状や、学生がまだ留学に対して距離感を感じていることを学ぶことができた。

このように反省点はあったものの、一番の目的である「留学を身近な選択肢にする」ことが実際の学生の声や留学応募があったことから達成することができたと言える。

しかし、同時に本企画を通してまだまだ留学生を増やすには長い時間が必要であることを実感した。それは、留学が自分にはできないと感じるのは周りに留学経験者がまだまだ少ないからである。今後もこのような企画を通して留学に興味のある学生が増えていけば自ずと留学が選択肢として、周りの学生や後輩、そしてその後輩へと波及していくはずである。私たちはその後押しを今後もこのような活動を通して、少しでもできればと考えている。まだまだ道のりは長いですが、本企画を通して、今後は「留学をより身近な選択肢」から「当たり前の選択肢」の一つにすることで、北大生の生活を充実したものにすることに貢献したい。

■ 構成員

氏名	学部・研究科名	学科・専攻名	学年
佐原 愛士	工学院	北方圏環境政策工学専攻	修士 2
原田 要一	工学院	応用物理学専攻	修士 1
渋谷 智淑	農学部	農業経済学科	4
久保まりな	法学部	法学課程	4
永澤 慶章	法学部	法学課程	4

■ その他（希望・反省等）

本プロジェクトに採択されたプロジェクト間で交流の機会が欲しかった。理由は以下の2点である。1つは新規採択団体が継続団体から採択後の動きについて知ることができる点である。費用申請の段階で疑問が多くあり、以前の採用団体の学生から聞くことができればと感じることがあった。もう一点はお互いのプロジェクトのブラッシュアップができる点である。他団体の企画運営には少なからず自身の団体にも応用できる部分がある。これを企画段階から意見しあえる場があればより良いプロジェクトにできると考えられる。

■ 自己採点

【採点項目】

- 当初の目的を達成できた
- 期待される成果・効果をあげられた
- 自主性・創造性を発揮できる機会となった
- 今後の学生生活に役立つ経験であった
- 修学及び研究意欲を高めることができた

5：特にあてはまる

4：あてはまる

3：まああてはまる

2：あまりあてはまらない

1：まったくあてはまらない

